
大魔術師少女

poo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大魔術師少女

【NZコード】

N16350

【作者名】

poo

【あらすじ】

ある日一人の大魔術師はその生涯に幕を閉じた。しかし目が覚めると・・・

poo初のオリジナル小説です更新亀になりますがよろしくお願ひします。

大魔術師の終わり（前書き）

ooo初のオリジナル小説！！地雷要素ありなので気をつけてお
すみください。

大魔術師の終わり

大魔術師の終わり

ある世界に魔術のすべてを極めんとした魔術師がいた。彼はその人生の大部分をその研究にささげた。雨の日も晴れの日も彼はひたすらに己の魔術を更なる高みへと昇華せんとした。あるときから人々は彼を「大魔術師」と呼ぶようになつた。彼の魔術は人々の生活に光を与えた。彼にとつては取るに足らないものだつたが人々は彼が公開したその魔術の恩恵をうけそのことに感謝していた。しかし、そんな彼にも不可能なことがあつた。死を乗り越えることだつた。彼は今までにその死が迫つてくるのを感じていた。

「私は・・・死ぬのだな」

長い長い月日を己のために使つてきた。きまぐれで己の術を公開したこともあるた。

「感謝されるような人間ではなかつたのだがな」

別にそんなつもりじゃないのに入々は笑いかけてくれた。

「私はそんな立派な人間じやない」

大魔術師なんて私には過ぎた名だつた。

彼は朦朧とする意識の中ふと視界に人影を見つけた。

「こんなところに人なぞ珍しいな。幻覚か?」

いよいよ迎えが近いらしい。

「違いますよ! 大魔術師様! 私ですよ村長のグリンです!」

「こんな老いぼれのところへどうしたのかね?」

「いつもの魔術の研究をしている幹事がしなかつたのでここに来てみたのです。いますぐ医者を呼びますから」

「いや。いい。自分の寿命ぐらい自分で分かる。ここまで生きたのだ、思い残すこともない」

「そんなことをいうものではないですよ・・・」

なんで泣いているのだろうか？

「私のようなもののためになくでない」

「あなたのおかげで村は豊かになりました。私たちはあなたに感謝しても仕切れないのです」

「そんな顔をするな・・・そんな風に思われていたなんて・・・

「村長、お前のせいで思い残すことが出来たじやないか」

ああ・・・叶うなら

「まだ、生きていきたい」

こうして偉大で人々に慕われた大魔術師オドラ・エーネンシュルトはこの世を去った。

大魔術師の終わり（後書き）

がんばつて続けていきます

三覚め（前書き）

プロローグ終了。あまりにも短いので珍しく行間をあけてみた

田覚め

田覚め

私の意識が田覚めたのは三歳の頃だった。田覚めたといつても休眠状態であった

よつでそれまでの生活の経験思い出は私のものよつだ。どうやら転生と俗に呼ぶものを

私はしてしまつたらしい。そんなことがあるなど私は思いもしなかつたのだが、今の私の

名前はエルミラ・フォーネングベルト、性別は女。おそらく休眠状態で今の私の記憶とい

うか意識というか・・・がすゞじしていたのは魂を適切な状態にするためであつたと考えら

れる。自分の体が少女もとい幼女になつてゐるのに違和感を感じないことに感謝したい。

男の意識で女の体故の葛藤など経験したくないからである。研究が趣味のよつだつた人間

でもしたいこととしたくなることべりことはある。

私が住んでこるのはロングルード王國とこつ国の王都から馬で一

時間ほどの小物

な村である。私の前世で住んでいた世界には「のよひ」的な国も存在しなかつたことから俄か

には信じがたいが異世界なるものであると推察できる。生活水準はあまり変わりない。

「Hルちゃん……」飯ですよ

「はーい！」

考察はこれぐらいにしておこう。私はこの世界に生きてこないと、うことは確かなのだから。それに、少しがらい人の温かさを味わつても禰は当たらないだろ？。

目覚め（後書き）

次回から本編突入予定

口頭レポート（発表）

おもにした

日常と非日常

日常と非日常

この世に生をうけて早六年私の体は魔力量が非常に高かつた（前世よりも1割り増しほど）両親は私に魔術の教育を施してくれた。私の知つている魔術は詠唱式の魔術なのだが、この世界の魔術はそのほかに魔方陣をかけて発動する魔術印式魔術が栄えている。詠唱式よりすばやく発動できる反面効果を上げるために魔方陣をより複雑に入り組んだものにしないといけないという面もある。私はその両方を合わせた混合型の魔術の開発に今は全力を注いでいた。日常に変化はなく家族はとても仲がいい。こんな日がずっと続けばいいと思つていた。

しかし、時は流れて私が十三の時のことだった。突如亜人の群れが現れたのだ。亜人一匹で大人十人分の強さを發揮するといわれているのにそれが人口300人ほどのこの村に120匹も押し寄せてきたのだ。

「エル！！逃げなさい！！」

「ここは父さんたち大人が何とかする！！」

「エルミラちゃん逃げるんだ！！」

母様が、父様が、村の人気が私に向かつて叫んでいる。でも私は動けない。

「何してるんだ早く！！！」

村が壊されていくたつた十三年・・・でもとても暖かな年月を私に与えてくれた村が、八百屋のおじさんが自慢してた看板が、隣の

家のお姉さんが結婚した時に持つていくといってた宝物の箱が納めてあつた小屋が・・・みんなの大切が壊されていく。許せない・・・
許さない！！！

「絶対に許さない。我が魔導の前に果てるがいい」
膨大な魔力の奔流が目に見えるほど濃度で起こる

「エル！！何をするつもりだ！！！」

「開け。悠久の門よ。空に響く祝福の鐘がお前の目覚めを知らしめる」

呪文を唱えるとともに魔力の奔流が次第に魔方陣を形成していく
「なんだ・・この魔術は！！」

皆の驚く声を無視して私は詠唱を続ける。

「響け、響け煌めく鐘よ。世の果てまで知らしめよ。今仮初の王
が門をくぐった。理を紡ぐは王なり」

芸術にまで昇華された幾何学模様を刻まれた魔方陣が完成した。

「なんと美しい・・・」

「幻影の王の凱旋」

魔方陣をくぐって濃密な魔力で形成された騎士が現れた。
「行け。我が最強の守護者よ」

口輪ヒゲ口輪（後輪）

まあ氣長に見守つてください

圧倒（前書き）

相変わらず長くかけない

圧倒

圧倒

魔方陣より顯現した王の力は圧倒的だつた。騎士の攻撃でも一発で飛ぶことのない亜人の首が腕の一振りで粉々に吹き飛んでいく。

「すごい・・・」

「俺たちは助かったのか？」

と村の人々は口々に安堵の声を口にしたが、

魔術師として優秀な父は違つた。

「エルミラ。強制顯現は見事だったが。あれは後どのくらい持つ？」

そう顯現に使つた魔方陣は汎用性の高い高度魔方陣。王のような上位魔法体の顯現には通常正規の専用魔方陣がある。今回はその構築をする暇がなかつたので強制的に顯現させたのだ。つまり、非常に不安定な顯現であるため長時間の境界は不可能なのだ。

「精々後三分といつたところでしょう」

「なら次の手を打て。その間の時間稼ぎぐらいはできるさ」

そういうと父は地面に手際よく魔方陣を書いていった。そしてその魔方陣から氷の壁ができて亜人の行く手を遮つた。

「今のうちだエルミラ！！」

エルミラは次の呪文を唱え始めた。

「世界の果ての終わりを紡ぐ、敗者の詩に心を惹かれ、現の光は今はなく。世界は闇に包まれる。我が行く手を阻むもの、我が理に仇なすもの、汝が先に当てはなく、現に縛られ死に逝くのみ

亜人の足元に大規模の特殊用途魔方陣が展開される。

「ならば我は汝らを現の世から救済せん」

魔方陣が光り始め亞人たちは慌てるが氷に先を塞がれて逃げるこ
とはできない。

「冥府の鎖』第十三連番我、黄泉へ誘う者』」

突如出てきた漆黒の鎖に絡めとられ一匹残らず魔方陣へ引きずり
込まれていった。

かつての大魔術師の片鱗をみせる圧倒的な強さのその中に少女は
獰奇的な美しさを醸し出していた。

日圓二十圓、兌換出立（繪畫板）

スランプ中 . . .

王国騎士団、そして出立

王国騎士団、そして出立

亜人を殲滅して家が壊れたりなどの物的損害はあったものの、死者は一人も出なかつた。

「ヘルニアよくやつてくれた。お前のおかげでもんな無事ですんだ」

「いえ。お父様がいなければこう上手くはいきませんでした」

みんなでお祭り騒ぎをしているとふと誰かが疑問を口にした。

「でもよ。なんでこんなところにあんなに亜人がでてきたんだ？」

「そういえば・・・・」

「ここら辺の亜人なんて数えるほどしかないだろう」「元々皆が日々に自分の疑問を口にし始めた。そのとき甲冑のこする音がたくさん聞こえてきた。

「なんだ？」

「いつたいこれは・・・・」

その疑問はすぐに解消された。森の中から駆け足で現れたのは

「王立騎士団・・・!？」

皆が驚いていると中から団長らしき人物が現れた。

「我々の不手際でとんだ迷惑をかけてしまつた。本当に申し訳な

い

そういうて深々と頭を下げた。

「いや、皆このとおり生きているんだ。あなたが気に病むことではありますよ」

そう村長は言った。

「申し訳ない。しかし、亜人の群れはもつといた筈ですし、この死体・・・一体そのような殺し方を?」

「ああ。それか？それは私の娘がやつた」

そうエルミラの父が言つと、その顔を見て団長は驚きの声を上げた。

「あなたは先代の宫廷魔術師長！……！」

「え！？」

思わずエルミラは驚いた。

「なに。片目の視力が低下してほとんど複雑な魔方陣描けなくなつた私にその名は相応しくない」

一呼吸おいて話を続けた。

「そこで願いがある。この娘を宫廷魔術師に推薦していただけないか？」

「そんなことは私ではなく先代のあなたが推薦したほうがよろしいのでは？」

「いや騎士団長じきじきの推薦のほうがいい。私からの推薦では何かと角が立つからな」

「分かりました」

そこに恐る恐るエルミラが

「あの？私の意志は？」

「なに。修行だと思えばいい。お前の実力は他の魔術師を凌駕する」と私が保証する

「えつと。どうしても？」

「ああ。あきらめていつて來い」

「がんばってね。エルミラちゃん」

そう村のみんなに見送られエルミラは騎士団の面々とともに一路王都へと旅立つた。

富廷魔術師の日常（前書き）

制作時間三十分（ストーリ思考時間込み）

宫廷魔術師の日常

宫廷魔術師の日常

「ここはエルトーラーズ。この世界で三本の指に入る大都市であり、リンクルード王国の王都である。あれから一週間ほどして正式に宫廷魔術師になつた。リンクルードでは宫廷魔術師には個人の家、しかも研究室付きが支給される。そんな私たちの仕事は明確に決まつた物はない。ただ朝早くにある宮殿での集会にいき、大臣や官吏達と一緒に国王の訓示を受け、あとは自由・・・といつても夕暮れになつて帰宅許可の出る時間までは宮殿内にいなければならぬ。その間はだいたいの宫廷魔術師は一応割り当てられている駄弁り塔、もとい魔術塔（正式な仕事場）で待機してお茶を飲んだり、魔術談義に花咲かせたりしている。

「ヘルミラちゃん。この捕縛魔方陣なんだけど、もう少し魔力消費を抑えられないかな~？」

そう質問してきたのは、私の五年先輩のフェリアさんである。この人は今まで一番年下だったため、年下が入ってきて嬉しいらしくよく私のことを気にかけてくれる。しかもこの人は魔術師としても優秀で努力家であるので、こうして年下の私にも意見を求めてくる。

「これ以上効率を上げた魔方陣を書くんだつたらどうしても威力が落ちてしまうんじゃないでしょうか？効果を落とさないのであればこれが最善だと思いますよ」

「うーん。やっぱりそうだよね・・・最近下着泥が出るから設置しどうと思つたんだけど・・・」

「ー? フェリアさん!! ダメです!! この捕縛魔方陣のベースにしてるの対亜人用ですよーこんなので縛つたら全身骨折ですよ?」「あー本当だー。じゃあ、もつと削つても大丈夫だつたんだね」

「その前にこの魔方陣教えたの誰ですか？危うくいぐら下着泥棒
といつても重傷者が出るところでしたよ」

「ううん？誰だっけ？忘れちゃった」

はあ・・・この人は。どうもどこか抜けてるらしい。

「皆さんー！フュリアさんにこの捕縛魔方陣を渡したのは誰ですかー！」

こうして犯人探しが始まつた。

「私じゃないよ？」

「俺じゃないよ？」

「お前じゃないのか？」

「なんで私なのよ！！！」

などと一時間もこの犯人探しは続いた。その時だつた。

「お前ら何そんなに騒いでるんだ？」

その人は入つてくると私が写し取つておいた魔方陣を見て言つた。

「この前渡した捕縛魔方陣か。使つたか？」

などとへらへら笑つてゐる。このとき今まで疑心暗鬼で犯人探しをしていた。みんなと私の思いは同じだつた。

「…………あんた（あなたです）か—————！」

「…………」

その後ボコボコになつて発見されたこの男こそが宮廷魔術師内最大の要注意人物、宮廷魔術師長のアンドリュー・ベルスバッハである。私の日常のストレスは八割がこの人が原因で間違いない。一日を振り返つてそう思った。

これも・・・仕事？（前書き）

途中まで主人公の名前を全部ほかの作品の名前で書いててびびった。

これも・・・仕事？

これも・・・仕事？

今日は珍しく仕事がまともに入っているらしい。みんなの顔から「え？ 仕事？ だるいんですか？」みたいな雰囲気が漂ってくる。

「働きたくないで！」さる。今日はのんびり昼寝するぞ！」さる。さらば！」「

グシャー！！！

「ふげらーー！」

いつの間にか魔術師長の暴走を止める係りのようなものになつているエルミラが即席の氷弾を自由への逃亡を図った彼の後頭部へ直撃させ鎮圧。エルミラたちはおとなしく仕事へ向かうことになった。

「仕事つて・・・これは？」
「ああ。治水工事だよ・・・」
「それは私たちがやるような仕事ですか？」
「予算が上がらないで凍結してた事業らしくてさ。その計画の主任が昨日「暇か？」って尋ねてきたから暇だつて答えたからうなつた」

「自分で原因作つといて逃げようとしたのかこの人は・・・」「まあ。そう怒るなつて。可愛い顔が台無しだぞ？」「おだてても何も出ませんよ？」「別にそういうわけじゃないんだが」

アンドリュー・ベルスバッハ三十二歳顔はイケメンなもののは破天荒で適当な性格が災いしいまだ独身である。

そんなこんなで工事は進んでいた王国に流れる川の中で一年に一回も氾濫するこの川は有名だったが辺境にあるため予算が少なく今まで何も手を打てなかつたのである。今回はこの川を途中から分岐させ氾濫の危険性を減らす計画である。その水路を今掘っているのが・・・

「ヒヤッハ――――――！」

ドガン――

「抉るよつに打つべし

チユードーン――

「やりすぎだろ・・・

しかし仕事はこなしているので文句も言えないエルミラだった。

そんなこんなで突貫魔術工事で一週間で開通した水路だった。周辺の住民は水路に水が通ったのを見て喜び、子供は水で遊んで笑っていた。

そんな光景を見て夕陽を背にアンドリューは

「たまにはいいと思わんか？あそこで駄弁つて研究して暮らすだけじゃなくてこいつやって外で働いて、人の喜ぶ姿を見るのも。なあ、

エルミラ

「そうですね」

エルミラの中での魔術師長的好感度が少し上がった、そんな一日だった。

休日

休日

一応私たちも公式な休日がある。そんなに仕事しているか?とき
かれれば答えに詰まる。魔術師長なら満面の笑みで「少しさして
ぞ!」というところだが私はそこまで厚かましいことは自分で思
っていない。まあ、何にせよ休日なのである。

「ヒルミラちゃん一緒に買い物に行きましょう~

「今支度するので少し待つていてください」

そういうわけで今日はフエリアさんとお買い物に行くことになっ
ているのである。待たせているからこそで支度をしなきゃ。

「お待たせしました。フエリアさん」

「いえいえ。そんなことないですよ~。?・むむむ!~なんです
かその格好は!女の子なのですからそんなシンプルな格好ではいけ
ないのですよ」

「え!いや・・・別にそこまで言われる格好でもないとおもうので
すが?」

「ダメです!~せつかく素材がいいのですからもつと着飾らない
と」

そういうとフエリアさんは私の手を引いて服屋さんへ駆けていっ
た。

「ちよっと!~フエリアさん!待つてええええええええええええ~!~!~!

服屋についてからのフエリアさんの行動力は凄まじかった。

「これもいいかな~」

そういう言つて私に服を渡して着替えるように促すと次の服・・・・
といふことがずっと続いていた。

?

の？。あ！次はこれね」

「もう勘弁して……」

結局それなりにかわいいフリルのない服を何着か買い、フェリアさんの要望でフリル満載の服を一着買うことで決着が付いたときにすでに日が暮れていたことは言うまでもない。

「ちゅ・・・かれた」

あ、
嘆
ん
だ

休日（後書き）

実は最後のセリフ本気でタイプミスだったのですが気分で採用しました

情勢（前書き）

先行きが見えない・・・

急な話になるがこの世界には大まかに分けて三つの勢力がある。第一にもちろんこのリンクルード王国。魔術に優れた人物を多く輩出している。リンクルードは大陸の東部に位置する大国で今の広大な領土を確立したのは今から230年ほど前になる。そのとき起こった戦争で乱立していた小国家群を一気に併合していくのだ。そして大陸中央にある国はギルド連合である。その名のとおりギルドの長であるギルドマスターが治めている。そして今回話題になるのがリンクルードと連合を挟んで向かい合う大国、ブラウ連邦である。この国は傭兵国家として名をはせたブラウ傭兵团が団長を中心に国を立て、その実力を背景に大陸西部にあつた多数の小国家群を連邦制の一部に組み込み国家共同体としてその機能を果たしている。そして今年第12代連邦代表アインスベール3世が急死。跡継ぎのいなかつた代表の後継をめぐり連邦の中では不穏な空気が流れている。

「それにしても連邦が崩壊したらどうなるんでしょうかね？」

私は紅茶を飲みながら隣にいる魔術師長に話しかけた。

「ほぼ確実に戦争になるだろうな。まあ俺たちのところに飛び火しないでほしいけどな」

「私たちが直接巻き込まれることなんて王国が首を突っ込むかギルド連合が戦争に巻き込まれてつぶれたときですかね」

「そうそう。そのときは大陸で一百年以上なかつた大戦争だ」

「ありえませんよね」

「……このときのエルミラはこの先起きることを知る由も……

・ぐへ……」

魔力強化した拳を鳩尾に決めてとりあえず黙らせた。

「縁起でもないことを言わないでくださいー。」

「まあ、落ち着けよ。『冗談』でこんなこと話せるのは平和の証拠なんだからよ。なんとかなるだろ」

「それもそうですね」

ああ、紅茶がおいしい。

その後第十三代代表にアインスベルク3世の甥がエンファネルト2世として即位し事態は小康状態に入ったのだった。

「ほらな、なんとかなつただろ?」

「うるさいです。魔術師長」

異変（前書き）

ここから第一 chapterとも言つべきといふに入ります。要するに今回はつなぎの話・・・短いよ

それは突然現れた。大陸の北部の海上に突如島が出現したのである。調査に向かつたギルドに所属するハンターたちが既に5パーティも消息を絶っている。事態を重く見たギルドマスターから各国へ調査の要請が入った。ギルドが国に依頼をするという奇怪な光景になつたのだが、ブラウ連邦魔導騎兵隊500が消息を絶つたことで事態が用意ならざることになつていて、大陸中の人々が気づいた。あの島は何かがおかしい。これは共通認識になつていた。そこでギルドからランクハンターのパーティ一組に AAAランクパーティ5組、ブラウ連邦からは王立騎士団1500魔導騎兵隊500、リンクルード王国からは連邦陸戦隊1000魔導騎兵隊800、リンクルード王国からは王立騎士団1500魔導騎兵隊500そして宫廷魔術師を魔術師長自らが率いる50人が調査団として派遣されることになった。小国なら一晩からずに焼け野原に出来る兵力である。

「魔術師長。なんかこのまえよりやばい雰囲気ですね」
「心配するな。もしものことがあつたら俺が守つてやる」
「そういう言葉は将来奥さんにかけてあげてください」
「人が独身だからってなんだ。喧嘩売つてんのか?」
「いいえそんなわけではないですよ?」
「なんで疑問系なんだエルミラ!」
「そんなところでじやれあつてないでいきますよ~」
「じゃああつて(ねえ)(ません)!!」
フェリアさんに止められてようやく私たち宫廷魔術師は出発した。先に待つ謎の島への不安を抱えながら・・・

異変（後書き）

別に先の話が決まってるわけじゃないからどう締めるか考え中なんだよ

上陸（前書き）

細かく刻んでいこう

上陸

上陸

私たちは島の海岸線からすこしひいったところで今後の方針を話し合うことになった。私は副官としてその会議に出席することになった。

「先遣隊の消息はつかめたか?」

「いえ。海岸に接岸していた船以外に今のところ何もありません。会議の中ではやはり目新しい情報はなく何の痕跡も見当たらないことを確認しただけになり、今後の方針へと話題は移っていました。

「これから探索についてだが、舞台を一つに分けまずは沿岸部を探索。その後合流してから島の内部へ向かうといったのはどうだろう?」

ブラウ連邦魔導騎兵隊長が提案した。

「ふむ、それでいいと私は思うぞ」

王国騎士団派遣隊隊長が賛成を表明しほかの人たちも反対する人はいなかつたので特に議論することはなく次はどのよつて部隊を分けるかということになつた。

「連邦とギルドが西から、王国が東から回るはどうですか?」

「西のほうが少なくないか?」

「いや、ランクやAAランクがいるのだからひととんどんでしょう」

「確かにそうだが・・・」

「いや。これでいいです」

「それでは明日の明け方に出発ということです」

「今回の会議を終了させていただきます」

あつさりと最初の会議は終わった。

「魔術師長。起きてましたか?」

ずっと会議中田をつぶつていた上司に声をかける。

「あ？起きてたぜ。ただこういうのはほつとけばほかの偉い方が
きめてくれるの？」

「はあ」

まったく何かと省エネ思考のひとだな。

そして翌日の朝私たちは一 手に分かれて島の探索へと向かうことに
なったのだった。

島中央部へ（前書き）

ほかの作品をもつと進めたいのでその作品以外は長めのものはかけなさそうです・・・というかなんでノートの片隅に主人公の名前しか書いてなかつた作品を書き始めたんだろう？

島中央部へ

島中央部へ

結局のところ島の外周には特に何もなかつた。合流を果たした後私たちは島の中央部へと足を進めていくことになつた。

「ここまでなにもなかつたのは逆に不気味じやないですか？」

「確かにそうだな。まだ行方不明の奴らが一人も見つかつていな
いってのもきになる」

隣を歩く魔術師長とそんなことを話していた。あんまり話す相手
が周りにいないからだ。フェリアさんはさつきからぼーっとしてゐ
る・・・

その後隊列を組み直し歩みを進めていくがまわりはうつそうとし
た森で一向になにも変わつたことは起こつていい。この人数が進
むには多少面倒だつたがそれ以外に特に問題もない。何もないこと
がいつそ不気味に感じるほどだ。他の人たちもそう感じているのか
口数が減つてきてている。三時間ほど歩いたどううか。ふと遠くのほ
うからひんやりとした風が流れてきた。

「なんだ？」

「この先に何かあるのか？」

などと口々に言い合いながらよりいつそう慎重に歩みを進めてい
つた。すると前方に大きな洞窟のようなものがあり地下に続いてそ
こから冷気が漏れているようだつた。

「みんな。よく聞け！これから我々はここから内部に侵入する。
おそらくこの中に行方不明のものたちの手がかり、ひいてはこの島
の秘密が隠されているかもしけない。心して進むぞ」

エルミラ達はどこか不安な気持ちを押し殺して中に入つていった。

不可解な内部（前書き）

長く書けないね . . .

不可解な内部

不可解な内部

内部に入つてから徐々に行方不明になつてゐる人たちの痕跡を確認できるようになつてきた。トラップにかかつたあとが複数発見され、そこにのこつていたものからそう判断された。

「どうやら彼らはトラップを全て解除していくつてくれたようだ。おかげで楽に進めるわい」

「確かに彼らなら全ての罠を解除していくのも不可能ではなかつたでしょうな」

などと口々にみなが言い合つてゐる中私は何か不気味なものを感じていた。

「大丈夫」エルミラちゃん

フェリアさんが心配そうに声を掛けてきた。私はこの悪寒をかき消すように一度大きく身震いをして自分に言い聞かせるつもりで

「大丈夫ですよ」

と答えた。しかしながらにか不吉な感覚はぬぐいきれなかつた。

特に魔物が出てくるでもなく最奥へとやつてきたそこには奇妙な紋様がみ込まれてゐる扉があつた。

「とりあえずこの部屋で最後だ。なにか手がありがあるとしたらここだろ?。扉を開けろ」

そう命じられた兵士が扉に近づいていくとき今までの悪寒の正体を私は悟つた。ここだ・・・その扉には触っちゃいけない!!何が起ころかわからないけど止めなければいけないと思った。

「触っちゃダメ!!!!」

「へ？」

こちらを振り向いて驚いた顔をしたその兵士の手はすでに扉に掛けられていた。すると扉の紋様が赤く輝き次の瞬間に兵士の姿はどこにもなく徐々にあいていく扉を呆然と眺める私たちがいた。

禁忌の術式（前書き）

遅くなつたけど別に長いのを書いていたわけではないです。すいません

禁忌の術式

禁忌の術式

ただただ私たちは目の前の出来事に呆然とするばかりだった。目の前で行われた現象は間違いなく生命の魔力への転換、かつて私がオドラであったころ編み出そうとしたが暴走した時にあまりにも危険なために理論構築だけであきらめたものと酷似していた。あの術式なら人間の寿命10年分で大国を一つ大きくぼんぼ地に変える魔力になる予定だった。しかし目の前のこの術式はどうだろう、人一人、いやこれまでの人々も含めれば百人はくだらないであろうほどの魔力を生成したはずなのにその魔力はどこにいったのだろうか？そんなことを考えていると誰かが部屋の奥のほうを指さして

「おい！なんか壁に模様みたいなものがあるぞ！…」

その声に皆が部屋の奥に目を凝らした。

「なんだ？」

「なんんだか氣味が悪いな・・・・」

などと口々に口走った。そんな中私はこの模様はおそらくあれが今まで生成された魔力を使用するための陣だとあたりをつけた。そもそもなければ説明がつかなかつた。それほどこの陣にはなにがあると感じていた。何か人では触れてはいけないようなその存在自体が禁忌であるかのような・・・・

「おい、大丈夫か？」

少し考えに没頭しすぎてしまったようだ。魔術師長が声をかけてきた。それに

「大丈夫です」

とかえすと私はもう一度部屋の奥に描かれている陣に目を向けた。
突然陣が鈍い赤色に発光したのはその時のことだった。

田原の（前書き）

脳内の進行予定表にはこんなやつになかったはず！？

目覚め

目覚め

褐々しく輝く魔方陣そこからあふれ出した光は室内中央巨大な裁断に集約されていく。誰もが目を疑う光景、なぜならこの光は

「可視化できるほど濃縮された魔力だと！！」

驚いている間にも事態は刻々と進行していた天井の配列が入れ替わり新しい陣を構成しようとしていた。

「今度は何が・・・・」

新しく構成された陣が今度は青い光を発し始めた。その光に反応するように赤い魔力球が点滅しだす。誰もが息を呑んで状況を見守る中だんだんと赤い球の点滅が速くなつてくる。

「危ない！！」

「くそ！」

あたりが眩いばかりの魔力の奔流に包まれたのと私と魔術師長が簡易防御陣を展開したのはほぼ同時だった。

「皆さん無事ですか！？」

「おい！みんな無事か！」

後ろにいた人たちに声をかける。

「大丈夫だ」

「一人石が飛んできて氣絶してるが大丈夫だ」

返事が返ってきて安心したのもつかの間部屋の中はひびだらけになり陣はすべて壊れていたがその中心に膨大な魔力の塊である人型のなにかが煙にまぎれうつすら見えてきた。

「そこにはいるのは誰だ！」

そう部屋の中に問い合わせてみると思いもかけない返事が返ってきた。

「どもども。みんなのプリティアイドル、心のオアシス」とまお～様だよ～～！！！！！」

その声とともに煙が晴れると祭壇の上に露出の激しい女がいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1635o/>

大魔術師少女

2011年9月22日17時50分発行